

『御伝鈔』は正式には『本願寺聖人伝絵』と

いい、本願寺第三代覚如上人(一二七〇〜一三五二)が、親鸞聖人のご生涯を讃え絵巻物として広く世に伝えようと著されたものです。

しかし、絵巻物では大ぜいの人が拝観できないので、蓮如上人時代に詞と絵に分けられるようになりまし。その詞を『御伝鈔』、絵を『御絵伝』といい、ことに江戸時代になると全国各地の真宗寺院の報恩講では内陣余間に『御絵伝』が掛けられ、『御伝鈔』が拝読されるようになりまし。

『御絵伝』には一般に四幅絵伝のものと二幅絵伝があります。どちらも内容は同じで、上巻Ⅱ八段、下巻Ⅱ七段の計十五段に分け、二十の絵が描かれています。四幅、二幅とも右側の掛軸の下から上へと聖人の行実を見ていきます。

本願寺聖人伝絵(上)

第一段 出家学道

第一図 青蓮門前 第二図 へ左へ青蓮客殿 へ右へ得度剃髮 養和元年(一一八一)、親鸞聖人(幼名。松若麿)九歳の春、青蓮院の慈円僧正もとで出家得度し、「範寛」と名のりまし。

伝絵では比叡山での二十年間の修行の行実が雲間で包みかくして省略しています。

第二段 吉水入室

第三図 吉水入室
建仁元年(一一〇一)、聖人二十九歳の春、比叡山の自力修行では、後世の助かる道を見い出せず、聖人は、法然上人の門に入ります。吉水での六年間の修学は聖人の一生を決定しまし。

第三段 六角告命

第四図 六角告命
建仁元年(一一〇一)四月五日の夜、聖人は京都・六角堂で救世観音の告命をうけます。この夢告で、聖人のほんとうの生きかた(真宗)がよいよはつきりしたのです。

第四段 蓮位夢想

第五図 蓮位夢想
建長八年(一一五六)二月九日の夜、聖人(八十四歳)の弟子・蓮位房は、聖徳太子が聖人を弥陀の化身として仰ぎ合掌される夢をみます。

第五段 選択付属

第六図 へ右へ選択付属 へ左へ真影銘文
元久二年(一一〇五)四月、聖人三十三歳。法然上人は信望のあついで弟子である証に『選択本願念仏集』、さらに上人の肖像を写すことを許し、その教えを後世に伝えていく使命を聖人に託します。

第六段 信行兩座

第七図 へ右へ兩座進言 へ左へ信行分判
元久二年(一一〇五)九月、吉水の禪房で聖人(善信)の「往生は信心で定まるか、それとも行か」の立場を明確にしよとの進言により、三百余の門弟は着座の決断を求められ、法然上人の正判をうけます。

第七段 信心諍論

第八図 信心諍論
建永元年(一一〇六)八月、他力の信心について、聖信房、勢観房、念仏房との問答が行われ、法然上人の正判をうけます。

第八段 入西鑑察

第九図 へ右へ入西鑑察 へ左へ定禅夢想
仁治三年(一一四二)、聖人七十歳。弟子の入

西房に肖像の図面を許されます。絵師の定禅法橋は聖人を拝し「先日、夢の中に出てきた方だ」とその夢を語り、聖人を讃仰し描きます。

本願寺聖人伝絵(下)

第一段 師弟配流

第十図 念仏停止 第十一図 九卿僉議
第十二図 法然配流 第十三図 親鸞配流 第十四図 へ右へ越後巡錫
承元元年(一一〇七)二月、聖人三十五歳。念仏弾圧で師弟とも流罪になります。法然上人は土佐へ、聖人は越後へ。僧籍をはく奪された聖人は「愚禿親鸞」と名のられます。五年後の建暦元年(一一二二)十一月、罪は許されますが、聖人は帰洛せず、越後の教化に努めます。

第二段 稲田興法

第十四図 へ左へ稲田興法
建保二年(一一二四)、聖人四十二歳。越後より常陸国(茨城県)稲田に住まわれます。念仏の教えを説く聖人のところへは、身分に関係なく多くの人々が集まってきて、ここでも教えが民衆の生活の中に根をおろします。

第三段 弁円濟度

第十五図 へ右へ板敷撰化 へ左へ弁円濟度
寛喜三年(一一三二)、聖人五十九歳。多くの人々の尊敬を一身に集めた聖人に恨みを抱く山伏弁円は、聖人を殺害しようとしまし。板敷山での待ちぶせに失敗した弁円は稲田の禪室へ行きます。そこで聖人に出会った弁円は恨み憎しみの心が消え、それまでの心の内を語り弟子(のちの明法房)となりまし。

第四段 箱根示現

第十六図 へ右へ箱根示現

文暦元年(一一三四)、聖人六十二歳。関東から帰洛の途中、箱根権現で社廟の神官から丁寧なあいさつをうけます。

第五段 熊野示現

第十六図 へ左へ洛陽訪問 第十七図 熊野参詣
延応二年(一一四〇)三月、聖人は関東の門弟平太郎の熊野参詣について教示されます。

第六段 洛陽遷化

第十八図 へ右へ病床説法 へ中へ洛陽遷化 へ左へ入滅葬送 第十九図 葬送茶毘
弘長二年(一一六二)十一月、聖人は病床に臥されます。同月二十八日、舎弟・尋有僧都の善法院で入滅。遺骸は京都東山の延仁寺で火葬されまし。そして遺骨は同じ山の麓、鳥部野の北、大谷の地に納められました。

第七段 本廟創立

第二十図 本廟創立
聖人が亡くなられて十一日目の文永九年(一一七二)、弟子たちによって大谷の墳墓をあらためて、それより西、吉水の北のほとりに仏閣を建て影像を安置しまし。これがいわゆる本廟のはじまりです。

